

市民研会員から寄せられた

2020 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2021 年 2 月 15 日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ 3 作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画や TV 番組、聴いた CD や足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい 3 作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007 年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただきます。

●杉野実

1◆茨城県・笠間日動美術館「名品・珍品お宝展」(2020 年 3 月)

そう 3 月、コロナ騒動が（すでに始まっていたけど）本格化する直前ですね。この欄では 2 度目の登場となる「茨城の親戚」さんにたのんで案内してもらいました。マスクしている人はほとんどおらず、観光地には人々があたりまえのように集まっています...たった 1 年前なのに「隔世の感」さえあります。江戸時代の洋風画や明治時代の「自在置物」、洋画家佐伯祐三の（主として他人の作品からなる）コレクション、そして一般から募集した「私のお宝風景」写真...ほんと「なんでもあり」でした。一番すごかったのはフォーク歌手長渕剛さんの絵ですね。上手下手ではなく（実際上手ですが）「自分の表現したいものを持っている」という意味で、この人は本物の芸術家だと思いました。日動美術館は常設展もすごいんですね。「画家のパレット」は多分「看板にいつわり」ですが、「そういう展示作品」だと思って見れば結構楽しめます。

2◆原子モデルカードゲーム（アーテック）

名前からはちょっとわかりにくいかもしれませんが、「化学ゲーム」つまり原子のカードから化合物を作って遊ぶ「教育玩具」です。製作者が決めた「公式ルール」では、化合物の作りやすさに応じてつく点数をきそうことになっていますが、点数の決め方が恣意的と思われるうえ、「（プレイヤーにも化合物を考えさせる」という名目により）「点数表」にのっている化合物の種類も少ないので、この点数制にはあまり興味がわきません。「白紙のカード」もついているので、むしろ「自分ならどの元素を追加するか」考える方がずっと楽しいと思います。セットに入っているのは H・O・C・N・Cl・Na・Ag・Fe・Cu・S の 10 種類。「点数表」に硝酸系化合物がなかったことも気になりましたが、「どんな化合物ができたらか

もしろいか」考えて、私は B・Al・Si・Ca・Zn・U を追加しました。1 度に出せるカードは最大 6 枚。みなさんならどうします？

3◆柳沢大輔『鎌倉資本主義』（ダイヤモンド社）

スー・パーク『セミオーシス』（ハヤカワ文庫 SF）

アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』最終回「見えてる世界が全てじゃない」（2020 年 3 月）

またしても 2020 年 3 月！アニメ最終回の感動もさめやらぬ 4 月、新番組デジモンが突如鬼太郎再放送にさしかえ…。勿論、それもコロナのせいでした。…なんの話だったかな。ああそうだ、「(ときに) 対立する者同士が集まって、社会を作っていく」ということです。「社会起業家」柳沢さんは、「大抵の社会問題は『仲良し』で解決する」といいます。すごく美しくて共感できるのですが、詐欺師にだまされた経験もある私は、「『仲良し』だけじゃだめだろ」とつい、ツッコミたくなるのですね。パークさんの小説は、他惑星に移住した人類と、植物型・昆虫型知生体との「コンタクト」ものですが、「移民社会の創世神話にも、殺人などのタブーがふくまれている」という「副主題」の方が気になりました。そして鬼太郎。あらそったり仲良くしたりをくりかえす妖怪と人間は一体なんの暗喩か？…まあ問うだけ野暮というものでしょうかね。

●吉岡寛二

今年は三つとも、市民研から得た情報がきっかけになりました。本を読むのは電車の中という習慣だったのですが、完全退職したために読書量が激減してしまいました。阪急梅田にある紀伊国屋に行って本を漁る機会が減ったことも、読書量が減った原因の一つと思います。

1◆「分解の哲学—腐敗と発酵をめぐる思想—」（藤原辰史著、2019 年、青土社）

市民研 ML で、W さんが藤原氏の「パンデミックを生きる指針—歴史研究のアプローチ」（岩波新書 B 面）に感銘を受けたことを投稿されました。半年後、さらに別の会員の M さんから、藤原氏によるリモート講演会の案内をいただいたので参加してみたことが、この本を読むきっかけになりました。

ものごとについて考えるときの「基本的姿勢」と「やりかた」が私と似ているので、おもしろく読むことができました。掃除のおじさんの話、積み木の話、チャペックの未来小説の話、パタヤの話など、「直接は関係がない幾つもの情報」から「自分なりに一つの結論を見つける」という「やりかた」は大賛成だからです。ある結論を見つけるためにいろんな分野の知識は「こやしになる」ので、脱線も大好きという著者の感覚もいいですね。ただし「科学的論文の手法」とは全く異なるために、所属する学会内でも反発があるし、ネットでもボロクソ書く人がいるそうです。

余談になりますが、リモート講演会の冒頭に、気候変動のこと、日本学術会議の推薦拒否のこと、安藤昌益のことをちらっと語られたことも印象的でした。（市民研では、「安藤昌益」のいう名前をご存じの方が多いと思います。）

2◆「マキノゾミ (1) 東京原子核クラブ」(マキノゾミ著、2008 年、ハヤカワ演劇文庫)

市民研MLで、Sさんが「東京原子核クラブ」の公演情報をお知らせくださったのですが、私は関西に住んでいるので、それを観るためだけに東京まで行く気になりません。でも、本も出版されていることを紹介されていたので、本を購入して読んでみました。演劇の台本を読むのは中学校か高校の国語教科書以来で、とても面白く読めましたが、これは内容の秀逸さによるものでしょう。

昭和7年～昭和21年、東大近くの本郷にある下宿屋を舞台にした戯曲で、当時の日本人の考え方を代表させるようなユニークな人たちが出てきます。明治から敗戦後にかけての歴史知識がかなり増えていることもあって、楽しく読めました。

面白い！安い（税込み880円）！

3◆JT生命誌研究館(大阪府高槻市)

市民研HPに掲載されていますが、上田さんが「アイカム50周年企画『30の映画作品で探る"いのち"の今』第14回共に生きる いのちの中の人間（ゲストエキスパート：中村桂子さん）(2020/9/5)」の司会をされました。中村桂子さんと上田さんの対談内容を読んだら共感する部分があり、「中村さんてどんな人かな？」と思ってググったところ、高槻にJT生命誌研究館があることを知りました。

なぜ「生命史」ではなく「生命誌」なのかと最初に思いましたが、実際に訪問して「なるほど、そういうことかな」と感じました。「生命の歴史」は、英語では "Biohistory" だそうですが、日本語で「誌」というのは（誤用でなければ）「記録」を意味しています。生命の「歴史」に注目しているのではなく、生命を特徴付けている「DNA という記録＝誌」に注目していることを強調したかったのだろうと勝手に想像しました。（その真偽は確認はしていません）

中村桂子さんは、研究館の立ち上げ時の企画から主導的に関与され、2020年3月まで館長をされていました。京阪神にお住まいの方にはオススメです。

●澁谷 徹

1◆「性の進化史・松田洋一・新潮選書」

進化に関しての本は多いのですが、「染色体の進化」は珍しく新鮮でした。著者は長年、爬虫類や鳥類の染色体の比較検討をしてきており、そこから「進化」を考察した視点は新鮮でした。著者は長年の友人であり、成し遂げた研究の成果には感銘しております。蛇足ですが、この本は「毎日出版文化賞」を受賞しています。

2◆「人新生の資本論・斎藤幸平・集英社新書」

これまで「資本論」は買ったことはありますが、数ページで挫折していました。この本は、気候変動やコロナ禍などは資本主義の当然の行き着く結果で、経済成長主義こそは諸悪の根源であることを明確に示しています。これまでの「資本論」は成長主義でありましたが、晩年にマルクスは成長を脱却した理論を構築していたということです。その理論は現在編集中ということですが、発刊が待たれます。

3◆「わたしの今いるところ、そしてこれから・中村桂子・新潮社」

永らく生命誌館館長だった中村桂子さん編集の著作。生命誌館の目指したこと、やったこと、これからのことが明確に示されています。私も発足時は「生命誌」という言葉を理解できませんでしたが、その目的や成果が、その通りに実現されていることに感動しました。今後の更なる発展をお祈りしています。

●中瀬勝義

1◆斎藤幸平「人新世の資本論」集英社

刺激的な本が若い研究者によって出版された。今までのマルクス主義者のマルクスの理解は、エンゲルスのまとめたマルクスの資本論をベースにしている、しかし、著者は MEGA と呼ばれる世界的な研究者による新しい「マルクス・エンゲルス全集」の刊行に係わる中で、マルクスの平和的な農業や環境に注目した考え方を知り、暴力革命ではないオルタナティブな世界改革を、今こそ本当のマルクスを参考に作ろうとしている。

マルクスの 100 年前、江戸時代の安藤昌益は「平等、直耕、環境」を唱えている、そんな思想に戻ることだろうか。

2◆ケイタ「小学生がフランスの台所で教わったこと」自然食通信社

素晴らしい小学生の本に出会った。長野県の山の中の小さな村で元気に育った少年が、フランスに料理修行に出かけ、旅費はクラウドファンディングと驚きは尽きない。注目されているグレッタさんのスウェーデンでは小学生時代から地域の政治を教え、学び、行動するというが、日本の山の中でも同様のことが起こっていることに驚嘆した。都会の政治家は自分の意見がなく、忖度ばかりしている感があるが、日本の未来は地方から始まるようだ。

人権・民主主義日本を！

3◆政池明「荒勝文策と原子核物理学の黎明」京都大学出版会

荒勝は留学先のドイツでアインシュタインに会い、その人格の高さに感動したと書かれているが、世界を巡り、最前線の研究現場を体験していることに驚かされる。広島原爆投下直後には現地調査を行っている等、厳しい戦時下の科学者の機敏な行動に感銘させられる。最近の科学者は、原発再稼働に対しても、真に科学的な立場では取り組まない感がある。コロナ禍と戦争は似ているかもしれない。資源を独占・利用しようとして、人は集まり過密になり、感染症を拡大し、戦争を広げている感がある。新しい総理の下、ドイツの脱原発を見習って、国民の安心安全・持続可能な「人権・民主主義日本」を作らねばならない。生物多様性立国を祈念して！

●倉本宣

1 ◆地球の歩き方 東京 (地球の歩き方編集室 ダイアモンド・ビッグ社 2020)

大学院を中退して、基礎学から応用学に移ったとき、最初の職場は伊豆大島の大島公園事務所だった。その時代には、東京港から大島まで正味 5 時間かかったので、夜 10 時出港、朝 5 時元町港か岡田港着だった。当時は、コピーもファックスもパソコンもなかったので、大学院生時代の研究室に出入りしていた洋書屋さんと印刷物だけが情報源だった。

そのときに考えだした研究方法が、資料を本来の目的とは違う視点から検討するということがあった。愛染川流域の土地利用と地形の関係の変化を地形図から解析して墓地の立地特性を考えたり、自然保護団体の名簿から団体の多い自治体と少ない自治体の特性を検討したりした。

地球の歩き方の最終巻というこの本を眺めていたら、40 年近く前の興味がよみがえった。私は緑地生態学といってもよいような分野を担当しているので、地球の歩き方編集室は東京の公園や河川をどのようにとらえているかに着目して読んでみた。上野公園の写真、日比谷公園の記述はあるものの、ごくわずかだった。そこで、コロナ禍のオープンスペースの利用についていっしょに調べている大学院生に、自分の国の「地球の歩き方」についてどのようなバイアスがあるか考えてみないかと相談しているところである。

2 ◆河川工学者三代は川をどう見てきたのか (篠原修 農文協 2018)

私は 1975 年から多摩川の河原の自然を見てきた。多摩川の自然保護のシンボルカワラノギクと礫河原を再生することを夢見て研究を続けてきた。2015 年にイギリスの海岸の soft wall と呼ばれる土羽の護岸とそこに生育している海浜植物をみせてもらい、それを可能にしているのは災害の危険のある場所に人が住まないように土地利用を変えてきたことだと知った。2019 年台風 19 号による水害で、多摩川の周囲の低地が有している水害の危険性について多くの市民が理解したと思ったので、これは危険な場所から住民を動かして、本来多摩川のものだった土地を多摩川に返すチャンスだと考えた。これは、多摩川は洪水のたびに流路を変えていたので、低地全体が多摩川のものだという発想に基づいている。河川敷グラウンドの復旧にどれほどの費用が掛かる（例えば小田急線鉄橋下流左岸のグラウンドの復旧工事費は 1 億円弱）か、出水による土砂の堆積のために 1 年間以上使用できなかったので復旧の必要があるのか。しかし、現実の政治は、住民の安全を守るために、多摩川の河道を掘削して、断面積を確保する方向に進んでいる。

そこで、学生のときに勉強した安藝皎一、会ったこともある高橋裕、若い時からあこがれていた大熊孝と、近代河川行政 150 年という副題にひかれてこの本を読んでみた。私のすなおな感想は日本の河川は生きものやのものではなくて、土木やのものなんだということだった。カワラノギクプロジェクトなどのカワラノギク保全活動はすでに 4 半世紀続けてきた。絶滅の恐れがなくなったらやめるという約束で始めたのだが、やめることができない。次の世代にバトンを引き継ぐための新たなパラダイムをめざして、学ばなければならないことがたくさんあることに気づかされた。

3◆他者を感じる社会学（好井裕明 ちくまプリマー新書 2020）

しばらく前に仕事が忙しくて本を読まなくなった。心にもよくなかったので、子どもの時を思い出して、寝る前に、布団に入って本を読むことにした。子どものときは背伸びして大人の本を読んでいたのだが、すっかり歳を取ってしまったので、これ以上背伸びすることもできない。そこで、ちくまプリマー新書を読むことにした。

今年は、春学期がサバティカルだったので、1や2のように机に向かって本を読むようになった。ところが、いまも、本屋さんに行くと、ちくまプリマー新書を探してしまう。

人間は矛盾を抱えていることで、よりよく生きることができるようになる気がする。私が自分に用意した矛盾は「旧」姓使用だった。いまは、市民でもあり専門家でもあるという立場かもしれない。この本に書かれている「柔らかい、しなやかな心」は、私の中に生まれたり消えたりを繰り返している。この心が生まれたときを大切にできるように、布団に入ってから読書が続けていきたい。

●谷敦

1◆展覧会「ミナペルホネン つづく／皆川明」 東京都現代美術館

長らく建築の設計屋をしていたので、広い意味でのデザインの一角にはいたのですが、私自身はファッション業界に殆ど関心がなく、実を言えば次々に移り変わる流行とそれに連動して繰り返される大量生産→大量消費→大量廃棄の原因の一つがファッションではないかと思え、この業界に嫌悪感すら抱いていたのですが……たまたまTVの「日曜美術館」に紹介されていたのを見てこのデザイナーの名を初めて知り、その創作活動を貫く考え方に強く惹かれ展覧会場へ足を運びました。移り変わりの激しいファッション業界のただなかに身を置きながら、こんなにも地に足の着いた、実直でありながらファッションナブルであり、しかも何年も着続ける程味が出て、作った職人さんたちの努力が着る人にもそれとなく伝わる……そんなデザイナーがいたのか、しかも日本に。この人を知り得たことは大きな喜びであり希望でした。

2◆映画『モルゲン 明日』

反原発と再生可能エネルギーへのシフトを促す映画は今では数多いですが、この映画は多分それらの中で最も地味で、華やかさも面白みも乏しいものと思います。ただ、日本から見ていると、ヨーロッパでの自然エネルギー普及の鍵が政治であるように見えてしまいがちですが、この映画を観て「一人一人が日々思考し行動する成熟した市民たち」こそが政治を動かす主人公であることを強く感じました。選挙で投票するだけで民主的な政治が実現される訳はなく、一般市民のたゆまぬ学びと切磋琢磨、人々の連帯と日々の発信こそが社会を変えていく原動力であることを痛感させてくれる映画でした。

3◆ブランドショップ Mother House

Mother House は、一言で言えば「途上国ブランド」です。バッグ、スカーフ、ジュエリー等をその国々の材料と各国の職人の伝統の技を活かし「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という理念の基 2006 年にバングラデシュでスタートした、アジアの途上国を拠点とするとても若い会社です。

今や、安い労働力を求めて海外に生産拠点を持つ企業はいくらでもあります。この会社の視点はあくまで途上国目線。途上国の物的、人的資源を十分活かしながら先進諸国で認められる商品を開発、販売することを目指します。経営者は若い日本女性。このコロナ禍で世界経済が停滞、下請け労働者の多くが雇用を失っている状況下でも、この会社の各地の工場では、ちゃんとした感染防止対策をし、生産量を低減しながら操業を続け、雇用を守り続けているという、夢のような話。にわかに信じがたいことですが、実際に店を訪れると、製品の質の高さに驚くと共に、価格のリーズナブル（安過ぎない）なことに納得し安心します。大資本によるグローバル資本主義とは全く別の次元で、途上国の資源と伝統文化を活かしつつ、対等なビジネスパートナーとして双方が成長し小規模な経済をグローバルに展開していく。そんな可能性を感じさせる稀有なブランドです。

●山口直樹

Ⅰ ◆小田島隆、武田砂鉄『災間の唄』(サイゾー,2020)

専門的な本ではなく、一般書だが、現在の日本の文化状況をよく言い当てている時評集だと思うのであげておきたい。ツイッターが始まって10年以上になるが、これは、コラムニスト、小田島隆のここ10年の膨大なツイートをライターの武田砂鉄が、よりわけ全体の2%ほどに圧縮し成立した本である。“災間”という言葉は、2011年3月11日の原発事故から安倍政権のおわりあたりまでの間を指している。

たとえば、小田島は現代の日本政治について以下のようにツイートする。

〈「対案」を出せという言い方は、改革に反対する側に举证責任があるかのように見せかける議論のすり替えです。政治的な決断によって何かを変える場合、変えようとする側の人間が、メンバーの一人一人を説得しなければなりません。〉(2012年2月22日)

これはおそらく具体的には、改革好きの自民党や維新の会の周辺にいる人間に向けられているものであろう。「対案を出せ」は議論をすり替えるためのものだとし小田島は見ている。

また以下のようにもツイートしている。

〈この5年ほどの間に「政治的」という言葉は、もっぱら「反政府的」という意味でのみ使用され、解釈され、警戒され、忌避されるようになった。政権に対して親和的な態度は「政治的」とは見なされず、単に「公共的」な振る舞い方として扱われている。なんとも薄気味の悪い時代になったものだ。〉(2019年6月11日)

これは私も北京で経験した。沖縄のことや日米地位協定のことをやったときに北京の日本人社会から「政治的だ」という反応が来るようになった。私も薄気味の悪さを感じたものだ。

〈自分より教養の高い人と話をすることに喜びを感じるためには、ある程度の教養が必要なのだと思う。〉〈で、思うのだが、人文系の学部をつぶそうとしているのは、教養のある人間と交流することに苦痛を感じるタイプの人たちなんではなからうか。〉(2015年6月14日)

〈インテリ層をひとくくりにして敵視しようとする時代思潮みたいなものが形成されはじめている。〉(2012年7月2日)

これは、9年前のツイートだが、反知性主義の動きをとらえている。鋭敏な反応だと思う。

ほかには、たとえばこんなツイート。

〈2011年11月出版の拙著「その正義があぶない」(日経BP社刊)のタイトルについて、後悔している旨を何度か表明

しているのだが、理由は、それがイトイ村の周辺から提案された書名だったからだ。考えの浅かった当時のオレは「それもそうだなあ」と了承しまった。とても後悔している。〉

〈糸井重里氏とその周辺の人々は、震災&原発事故以来、人々が「正義」を語ることや、政治的にふるまうことを時にはあからさまに時にはやんわりと攻撃し続けている。私はその立場にいつも強い違和感を抱いている。正直な話、卑怯な態度だと思っている。ま、オレがそう思っているというだけの話だけど。〉（2020年3月8日）

〈参考意見として「よりスキャンダラスでないほう」「より脅かしてないほう」「より失礼でないほう」「よりユーモアのあるほう」を選ぶのはかまわない。ただ、「より正義を語らないほう」を無条件に選ぶと、結果として「より現体制維持に都合な言説」を選ぶことになると思う。〉（2019年4月28日）

〈この30~40年の間に、日本人が失った（あるいは「表明することを許されなくなった」）感情があるとすれば、それはなによりも「怒り」だ。怒りには大きな副作用があるし、社会の前提を破壊しかねないものでもある。でも、怒りを抑圧した社会は、それはそれで、うすら寒いディストピアだと思う。〉（2020年5月16日）

「より正義を語らないほう」を無条件に選ぶという風潮は、糸井重里らがつくりだしているものだが、結局のところ現状肯定へつながる言説にしかない。

糸井重里といえば、東大名誉教授の早野龍五氏との共著『知ろうとすること。』を出したことで知られる。最近、早野氏らが、原発事故後の福島県伊達市の住民の被曝線量を分析した論文について、市民の被曝線量を3分の1に少なく見積もっていたことを本人が認め、この論文が掲載されたイギリスの放射線防護専門誌「Journal of Radiological Protection」に修正を求めたということが明らかになった。「より正義を語らないほう」を無条件に選ぶ」ということも疑ってみる必要があるのではないだろうか。そして「より正義を語らない」ことを無条件に選ぶことは、同時に「怒り」を抑圧することにつながる。市民科学者とは、社会的な怒りを持った人であり、「正義とはなにか」という問いに関心を持っている人のことである。

また、ユーモアや笑いが持つ暴力性についても指摘されている。

〈笑いは権力に抵抗するための有効な手段だと言われている。もちろんそういう側面もあるのだろう。でも、テレビ経由で流れているお笑いネタの大半は、強い者が弱い者をナブる時に起こるアクシデントを笑うパターン芸で、むしろ権力の作用そのものだったりする。〉（2017年10月17日）

ここでいわれているテレビの笑いの代表が、松本人志である。

このことについて小田嶋は「吉本が笑いの中心になってから、批評的な笑いが一切消えて、後輩をいびってみんなで笑うような、ほもソーシャルのなかの笑いが主流になってしまった。松本人志はそのチャンピオンでしたからね。松本は地頭が良くて、教室の後ろのほうでときどき面白いことを言って混ぜ返すタイプ。それが力を持ってしまったということが、なんていうのかな、真面目に考えることをバカバカしくしちゃう空気をつくり出したんじゃないのかな。」と述べている。

それに対してライターの武田砂鉄は「たぶん、いまの小田嶋さんのたとえで言うと、これまで、教室の後ろでやんややんや騒いでいた人たちが、いまはもう、教壇に立っているわけですよ。で、その教壇から生徒に対して何を求めるかといえば、同調です。教壇でやっていること、言っていることの面白さに気付けたか、あるいは、いい感じに揺さぶってみろと迫る。僕はナンシー関さんのコラムが大好きでしたが、ナンシー関さんは生前、松本さんのことを高く評価されていた。それは、業界の仕組みに突っかっていく一匹狼的なところへの評価だったはず。いま彼を見て一匹狼と思う人はいないでしょう。一匹狼ではなく、群れの長です。」と応じている。

私もナンシー関は好きだったが、北京で松本人志と因縁浅からぬ吉本芸人であるぜんじろうと会ってこのことについて話し合ったことがある。ぜんじろうは、日本のテレビの笑いからは、皮肉の笑いが、完全に排除されてしまっているといっていた。そして「松本人志を吉本における漢民族だとすると自分はウイグル族です」とも言っていた。

次の小田嶋の言葉は、現在のテレビの笑いをよく言い当てていると思う。

「中小企業の社長がなんか言うのとどっと受けるとか、織田信長が「あっぱれじゃ」と言うのと「ほほー」みたいな。その世界に入っちゃっている。お笑いの世界じたいがそういうピラミッド構造のなかで、下の者は「私は笑っていますよ」というサインを出す。あれは権力関係の笑い。笑いが上納されているんですよ。」

ほかに印象に残ったツイートとしては、

〈日本学術会議から学術を追放すると日本会議になることから、学術の必要性は明らかな。〉(2017年12月30日)

〈次からは首相もパソナからの派遣でまかなうことにしたら良いのではないかな。〉(2020年8月29日)

などがある。ツイートのあとに現実が追いついてきている。

こうしたツイートが満載でどこから読んでもよい。なにか心にひっかかるツイートがあり、そこから考えを深めることができれば、有益だろう。

各章には、武田砂鉄の解説があり、最後には、小田嶋氏と武田氏の対談がついている。

本書は、もっとも批評性を持ったツイート集の一つではないかと思われる。

2 ◆アンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』国分俊宏訳(光文社古典新訳文庫,2019)

2021年はソヴィエト連邦が崩壊して30周年という年である。

アンドレ・ジッドは、フランスの1869年生まれの作家であるが、彼が、1936年6月から8月にかけてソヴィエト連邦を旅行した「ソヴィエト旅行記」(1936年11月)と帰国後に書かれた「ソヴィエト旅行記修正」(1937年6月)の二つの文章が、収録されている。

なぜ、ジッドは、ソヴィエト連邦から招待され、旅行することになったのか。

1917年のロシア革命で誕生したソヴィエト連邦は、世界初の社会主義国として世界の知識人から注目を集めていた。ジッドもその一人であり、ジッドをとらえていたのは、社会主義における「平等」という理念であった。

また、フランスは第一次世界大戦で大きな被害を受けており隣国ドイツでは、30年代にナチスが台頭してくるなどソヴィエト連邦には、反戦や反ファシズムの拠点として期待する知識人は多かった。ソヴィエト連邦から新しい文化が、生まれると期待した人も多かった。ジッドも社会主義ソヴィエト連邦へのシンパシーを公言し、ソヴィエト連邦に近い人間だと周囲からも見られていた。そこでソヴィエト連邦政府から招待されて旅行するのだが、ジッドは、そこで失望する。

たとえばジッドは「レニングラードから戻ってくると、モスクワの醜悪さがより一層際立って感じられる。精神が圧迫され、鬱々とされるほどだ。ごくわずかな例外を除いて、建物はみな醜く(最新の近代建築に限ったはなしではない)」それぞれ互いにまったく調和していない。」(48頁)と書いている。

また「ソヴィエト旅行記修正」(1937年6月)では「私たちがソ連で見たものがどれもこれも楽しそうに見えたのは、ここでは楽しそうでないものにはことごとく疑いの目が向けられるからでもある。悲しんでいること、少なくとも悲しみを表に出すことは、きわめて危険なのだ。ロシアは不平を口にすべき場所ではない。シベリアに送られたくなければ。」(237頁)と書いている。このジッドが書いた本には、

「裏切者」と罵声が浴びせられ、左派メディアからは反共宣伝の書だという批判が殺到した。

1924年のレーニンの死以降、ソヴィエト連邦では、トロツキーは追放され、1920年代後半からスターリンが権力を掌握していた。ジッドがソヴィエト連邦を旅していたころは、スターリンの神格化と粛清による銃殺が相次いでいた時期である。ジッドは、自分が構想した「平等」とは程遠いソヴィエト連邦の現実を感じ取っていたのだった。同じフランスの作家だったロマン・ロランは、「スターリンを支持する」と書きジッドを批判した。

また、日本のプロレタリア作家、宮本百合子もまたジッドを批判していた。

だが、ソヴィエト連邦崩壊の30年後の今から見るとロマン・ロランや宮本百合子は、現実から乖離した無残な文章を書いていたことがはっきりしている。ロマン・ロランは1939年の独ソ不可侵条約でヒトラーとスターリンが手を結ぶのを見てさすがにソヴィエト連邦とは距離をとるようになる。だが、日本では、ソヴィエト連邦のユートピア幻想は消えず、1953年のスターリン死後のフルシチョフのスターリン批判でようやくソヴィエト連邦の現実に気が付くという人が多かった。「日本からは一人のジッドもでなかった」と渡辺一民氏は『近代日本の知識人』（筑摩書房1976）のなかで述べている。

人はしばしば、招かれて接待漬けにされれば、その国を過度に理想化してしまうものだ。

たとえば、北朝鮮に招かれ接待漬けにされた日本の知識人が、北朝鮮を楽園だと考えてしまうような例がある。しかしジッドは、そのような誤りを最初はしていたのだが、途中で自分の誤りに気が付き、正確にソヴィエト連邦の現実をとらえることができた。それは何故だったのか。それは本書を読んでみて考えてみていただきたい。ソヴィエト連邦は30年前に崩壊したが、ジッドが直面した問題は、単純に終わったと考えることはできない。

本書は、国家や会社における監視社会化や全体主義化が進行する日本でも十分に読む価値があると思われる本なのである。

3 ◆ベルトルト・ブレヒト『ガリレオの生涯』谷川道子訳(光文社古典新訳文庫,2013)

ブレヒトは、1898年にバイエルン王国のアウグスブルグに製紙工場の支配人の父とフリードリッヒと母、ゾフィーとの間に生まれた。ミュンヘン大学哲学部(のちに医学部に転部)で主に自然科学を学んでいた。

1930年代には、科学について以下のような言葉を残している。

「科学の成果は、科学者の手から奪い取られてきた。で、科学者の態度を批判する立場に、視点を移してみるべきだ。自然科学の成果は技術に足を踏み入れたが、技術は産業に規定されていた。ある種の、きわめて確定的な交換過程が介入してきたが、その場合、科学は一定の機能を振りあてられた。科学の広範な活動の場は見渡しがたい。が、それは無限ではない。科学は一つの全体性を提供しつつあるという叫びが、こんにち高まっている。とはいえその叫びは科学そのもの—おそらくそれは、ますますふかまりつつある純粋化の直面している—から起こったわけではない。全体性を求める叫びは、ひとつの要請である。それがいま必要とされているのだ。」(163頁)ブレヒト『ブレヒトの政治・社会論』(河出書房新社1972)

科学論への関心も深かったことがうかがえる。1920年代後半からブレヒトは、意識的にマルクス主義を学んでいた。その場合のブレヒトの先生にあたるのは、カール・コルシュという政治哲学者であった。1933年にナチスが台頭し、ブレヒトは亡命を余儀なくされる。

そのときブレヒトが亡命先に選んだのは、デンマークのスウェンボルという港町であった。

このスヴェンボルにはブレヒト、コルシュそしてヴァルター・ベンヤミンの三人が亡命し、小さな知的共同戦線といったものを形成していた。彼らはこの亡命の地にあって幻滅や絶望からの希望の不断の再生を試みていた。後年のコルシュ夫人の回想によると、コルシュとブレヒトの交流は、実に活発で、ふたりは毎朝のように顔を合わせ、数時間いっしょに仕事をしたという。ブレヒトは、『スヴェンボルの詩』としてまとめられる詩を書き、コルシュは、「スヴェンボルのマルクス」とよんでいたマルクス論を書いた。ベンヤミンは1934年、36年、38年の三度の夏をブレヒトの客として過ごしていた。

ヨーロッパ革命挫折以後の転換と屈折の時代にあって現実を弁証法的に打開しようとコルシュやブレヒトやベンヤミンは、試みていたのである。

ブレヒトによって『ガリレオの生涯』が書かれていた1930年代後半は、ファシズム支配と帝国主義戦争によってだけ特徴づけられるものではない。これに対抗する最も強力な現実的拠点と考えられたソヴィエト連邦において建設の進展と政治的退行にかかわる内部矛盾が深まりつつある時代でもあった。端的に言えば、スターリン主義という全体主義が、ソヴィエト連邦で支配的になっていた。

1917年のロシア革命後、1918年にドイツで革命が生じた。ところが1921年にはドイツ革命の敗北は決定的となり、ヨーロッパ革命や世界革命への展望は失われる。

ブレヒトは、このヨーロッパ革命の敗北後にソヴィエト連邦が「一国社会主義」建設の路線を歩んだことを必然的な過程だと認識していた。この点は、レーテ(ソヴィエト)運動にかかわったコルシュとは違って1920年代には、コルシュのようにソヴィエト連邦を「赤色帝国主義」と批判したりはしなかった。

ブレヒトは、1920年代からソヴィエト連邦の発展の積極面をより評価していた。

1933年にドイツがナチズムに支配されるのを目撃し、ナチズムの根源が資本主義社会内部に存在することを認識していたブレヒトには、反ファシズム運動の具体的な拠点は、ソヴィエト連邦においては考えられなかったのだ。だからブレヒトは、ジッダの『ソヴィエト連邦旅行記』(1936)を当初は、批判していた。しかし後にはブレヒトもソヴィエト連邦に楽観的とはいえなくなっていく。

「ガリレイ」第14場は、宗教裁判所の審問を受けて、自説を撤回したガリレイが、なお死ぬまで宗教裁判所の囚人として社会から隔離されながら科学の研究を続けている時期(1633-42年)を扱っている。ブレヒトは、権力に屈して「地球が太陽の周りを回る」という自らの主張を取り下げたガリレオを厳しく断罪した。ガリレオは権力に屈することによって自らの延命を図り、密かに研究を続けられる条件を獲得したが、それは市民(民衆)と結びついた科学を否定することになった。その結果、科学は学者だけのものとなり、非政治的になり現実から切り離されたものとなったのではないかと批判した。すなわちブレヒトは、近代科学の歴史を権力への隷属の歴史に転落させるきっかけをつくったこと「撤回」の原罪性を意識してもいた。「撤回」を選んだことによってガリレイは屈折を通じて研究の進展というプラスと権力への科学の隷属というマイナスを同時に二重に選んでいた。広島、長崎への原爆投下後、ブレヒトは、『ガリレオの生涯』の改稿を行い、マイナス面を強調するようになったという。

ブレヒトが、市民科学の視点を持っていた劇作家だということを明確に示しているのが、

この戯曲『ガリレオの生涯』である。この光文社古典新訳文庫では、訳者の谷川道子氏のによって充実した解説が書かれ、そこでは、ブレヒトが、『ガリレオの生涯』に続いて『アインシュタインの生涯』を構想していたことが記されている。岩波版も悪くないが、私はこちらをお勧めしたい。

●白井基夫

◆2020 年は、在宅で音楽鑑賞

私は、クラシック音楽をこよなく愛する者です。2020 年は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、予定していた（定期会員として年間チケットを買っていた）コンサートなどには、ほとんど行けませんでしたが。その分、必然的に自宅ですごす時間が長くなり、たくさんの音楽に接することができて、新たな発見もありました。一方で、読書にはあまり時間を割かなかったことに気づきました。

今回は、昨年うちに鑑賞した自分なりの推薦映像を 3 点、紹介します。映像より CD で鑑賞する時間のほうが長いのですが、DVD や Blu-ray Disc もよくみます。とくにオペラでは、どんな演出で、どんな美術・衣裳かという点も興味深く、さらに視覚をとおすことで、理解がより深まるからです。字幕も便利です。

現在は、かなりの数の演奏・プロダクションを YouTube で鑑賞することもできるようですが、私はこの点でほとんどネットを活用することなく、現物を探す楽しみ・入手する楽しみも大事にしています（YouTube には、多数の歴史的なアリアなどがアップされており、ありがたいことは確か）。現物を入手するには当然、お金がかかるので、財布とにらめっこしながら、慎重に選択するわけですが。

◆ベートーヴェン、チャイコフスキー、バッハ

2020 年は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン生誕 250 年にあたる、アニヴァーサリー・イヤーでした。ショップでは大々的にベートーヴェン・フェアが開催され、新規録音のリリースや名盤の再リリースがめじろ押しでした。交響曲、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲など、「すべてが名曲」とさえいわれるなかで、彼による唯一の歌劇（オペラ）を紹介します。ゆえに、彼がつくった約 140 作品のなかでも特別な存在です。最後は、命がけて夫を解放したレオノーレを讃える、民衆による合唱で幕を閉じます。悪人はつかまり、駆逐され、解放の喜びと正義の勝利が歌われます。交響曲第 9 番の「歓喜の歌」と同じような締めくくりです。歌劇なら、本来はちょっと気の利いた楽しい部分があってもよさそうですが、そんなサービスは全編をとおして微塵もないところがベートーヴェンらしいのです。独裁的な政治の時代に終焉を告げ、市民社会を呼び込むような高いところざしを感じないわけにはいかず、この点も作品の魅力でしょう。映像と CD あわせて 20 種くらい持っていますが、もっぱら映像中心に鑑賞しています。

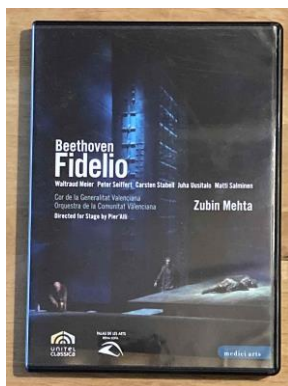
バレエ『白鳥の湖』は、悲しみをたたえたような旋律がよく知られています。それは序曲からあらわれ、十分に悲劇的な展開を予感させます。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーが作曲したのは約 150 年前、彼は 30 代なかば。現在ではさまざまな演出があり、王子や悪魔、道化師などの活躍の仕方が「版」によってだいぶ違います。なかには、王子がいわゆる「マザコン」で甘えん坊に描かれている版や、王子の家庭教師と悪魔が同一人物として描かれる版もあります。結末もそれぞれで、王子とオデットの愛の力で悪魔を打ち倒すもの、悪魔に負けて二人とも死んでしまうもの、二人があの世界で結ばれることを想像させるものなど。いずれにしろ、揺るがないのは音楽です。どんな演出になるにせよ、『白鳥の湖』が『白鳥の湖』というバレエ作品として成立しているのは、チャイコフスキーの音楽があるがゆえです。「オデット（白鳥）／オディール（黒鳥）」を、一人の人間の善悪のありようとして解釈する試みもあります。王子の精神分析論もあるとか。しかし、どう解釈されようが、どんな演出が出てこよ

うが、この音楽がある限り『白鳥の湖』は永遠に、バレエの頂点で燦然と輝く存在でありつづけるでしょう。すべてのダンサーが、最高のリスクペクト精神をもって、全身全霊をかけ、永遠に踊りつづける作品です。映像は、たぶん30種くらいはリリースされているでしょうが、私が鑑賞したのは12種です。

『マタイ受難曲』は、ヨハン・セバスチャン・バッハが作曲し、1727年に初演された作品です。キリストの受難（イエスが民衆の告発によってつかまり、ローマの支配者によって磔の刑にされ、葬られるまで）を描いた巨大な作品であり、「人類の遺産」とまで評されるのもうなずける、深遠な音楽世界です。ステイ・ホームの機会をとらえ、7～8種類のCDや映像で、2020年は集中的に鑑賞しました。関連書も何冊か読み、音楽の構造を立体的に把握することを心がけました。20年くらい前、文京区の東京カテドラル聖マリア大聖堂で実演に接したこともあります（指揮は古楽の巨匠、トン・コープマン）、そのときはまったく不勉強で理解できず、もったいない公演にしてしまいました。この作品が偉大なのは、特定の宗教・信仰を超えて、だれもが（歌詞の意味がまったくわからなかったとしても）「魂の救済」があるように感じさせてしまうところでしょう。五線譜上でも、涙の形に並べられた音符、イエスの傷を表す変化記号などが記され、バッハが全身全霊をもって作曲に取り組んだことがわかります。どの演奏でもよいし、BGMとして聴いてもよいので、とにかく「体験」してみることをおすすめします。

◆2020年、私の3点

①ベートーヴェン作曲：歌劇『フィデリオ』



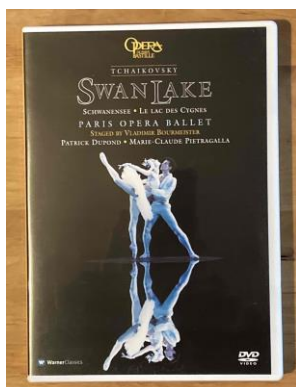
巨匠メータが、若い団員が中心のオーケストラから見事に鮮烈な音楽を引き出している。歌手もうまい人ばかりで、見た目にもはまっている。舞台美術は奇をてらわずにシンプルで、音楽の邪魔をしていない（時を現代に移した演出・解釈で「なんだこりゃ」と、理解に苦しみ、戸惑う演出も珍しくない）。映像の質もよい。

指揮：ズービン・メータ、バレンシア自治州管弦楽団

レオノーレ：ヴァルトラウト・マイヤー、フロレスタン：ペーター・ザイフェルト、ロッコ：マッティ・サルミネン

バレンシア、州立歌劇場ソフィア王妃芸術館 2006年

②チャイコフスキー作曲：バレエ『白鳥の湖』



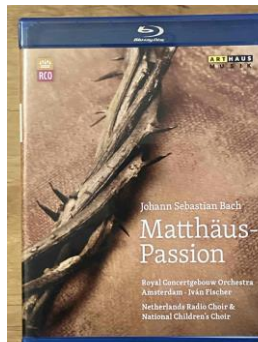
昨年、何種か買い足したが、「私にとっていちばん」は変わらなかった。LD（レーザーディスク）のときから親しんできた、ピエトラガラ主演のもの。パリ・オペラ座のプロダクションはどの作品をみても、ステージ・衣裳ともにうつくしく、『白鳥の湖』でもそれは変わらない（衣裳は毛利臣男）。色づかいも、クラクラするほど洗練されている。ちなみに、劇場別の個人的な不満をいうと、英国ロイヤル・バレエは格別な品のよさがある一方で、ステージが狭くて迫力に欠けるのが玉に瑕。ロシアのバレエ団は、身長が高い人が多く、見栄え・ワザではすごいが、地味な舞台・衣裳もあり、群舞がきれいにそろわないのが目立つ（逆に「泥臭さ」がよいという意見もある）。

実はこのプロダクション、経済学者の野口悠紀雄さんも「ベスト」と、ブログに書いている。

<http://office.noguchi.co.jp/archives/729>

ブルメイステル版 オデット/オディール：マリ・クロード・ピエトラガラ、王子：パトリック・デュボン
パリ・オペラ座バステュー 1992年

③J.S.バッハ作曲：『マタイ受難曲』



CDは何十種類もあるが、映像は選ぶほどリリースされているわけではない。比較的新しい記録であり、「これしかない」といえる。指揮者、オーケストラ、歌手という要素がすべてそろっている。しかも、ヴィオラ・ダ・ガンバは、上村かおり。オーケストラの後列から指揮者のとなりに移動して、ソロを弾くシーンまである（作品のなかで、かなり重要な部分）。

指揮：イヴァン・フィッシャー、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団
福音史家：マーク・パドモア、イエス：ピーター・ハーヴェイ
アムステルダム、ロイヤルコンセルトヘボウ 2012年

[オマケ情報] 上村さんの独奏CDが、最近、発売に。

『優（Yuu）～無伴奏ヴィオール作品集』 <https://www.hmv.co.jp/news/article/2012141037/>

●角田季美枝

1 ◆メノ・スヒルトハウゼン（岸由二、小宮繁訳）（2020）『都市で進化する生きもの：“ダーウィン”が街にやってくる』草思社、2000円＋税、四六判、352ページ、ISBN978-4-7942-2459-0

http://www.soshisha.com/book_search/detail/1_2459.html

2020年に読んだ本で一番おすすめしたいのが本書。都市の生きものの進化をテーマとし、特に景観生態学や進化生物学を学んだ人には「眼から鱗」の事例満載である。私にはロンドンの地下鉄にいる蚊の進化・適応が一番おもしろかった！（地下鉄の3つのラインに住んでいる蚊は遺伝子が異なっている！それを解明しようと思いついた研究者もすごい！）

遠くの秘境に行かなくても、観察者が生きている間に生きものの進化を確認できる舞台として都市に注目できることはよくわかるし、学術研究者ではないナチュラリストも追究を楽しむことができる。

市民科学的な内容としては、今後、都市の生きものの進化を観察するための道具などを提案している。スマートフォンなどITが発達すれば、あながち夢物語ではないだろう。都市と自然を二項対立としてとらえたり外来種を目の敵にするような生物観がなぜ日本では見直しが難しいのだろうと感じているが、これらの道具ができれば、確実にエビデンスを集めることができる。そんな期待も妄想ではないと励まされた。

気になるのは、本書では焦点ではないヒトという生きものの進化だが、それはいくつか出版されているので（たとえば、クリガン＝リード『サピエンス異変：新たな時代「人新世」の衝撃』飛鳥新社、2018年）、併せて読むといいだろう。

2◆金井真紀(2019)『虫ぎらいはなおるかな? : 昆虫の達人に教を乞う』理論社<世界をカエル 10代からの羅針盤 第2期>、1200円+税、四六判、160ページ、ISBN978-4-652-20309-5

<https://www.rironsha.com/book/20309>

とある大学(人文系)の緑の活用をテーマとしたオンライン授業(1年生対象;約90名)のある回で、「緑の創造というなら、メンテナンスは誰がするのか、虫対策はどうしたらいいかも考えてほしい」とコメントした。そのあと、何気なく「みなさん、虫にどんなイメージ持ってますか? 好きな虫、嫌いな虫いますか?」と、チャットを呼びかけてみた。すると、チャット欄があっという間に「嫌い」で埋まっていった(嫌いな虫に昆虫ではない「クモ」が複数挙がったのは「虫」をどう認識しているのかを表していて興味深い)。

「ええ?! こんなに嫌いが多いんだ!」と驚き、その後、他の大学(工学系)の環境と社会をテーマにしたオンライン授業(2~4年生対象;約50名)でも同様の問いかけを出欠コメントのお題にしてみたところ、「嫌い」が圧倒的に多かった(ただし、おもしろかったのは「嫌い」と回答した複数の学生が、「子どものころは虫とりをよくしていた」「クワガタ、カブトムシはカッコイイから好き」と書いていたことだ)。

昆虫は地球生態系で圧倒的なシェアを誇っている生きものである。昆虫がいなければ、ほかの生きもの(鳥類など)もいない。昆虫から学んで環境汚染の少ない技術も生み出されている。最近では、たんぱく源としても注目されている。なので、こんなに「嫌い」などのマイナスイメージが強いと、昆虫の価値というかおもしろさを口で説いても伝わらなそうだなあと痛感している。そこで、2020年度は「虫」のおもしろさをどのように伝えているのかという本を意識して読んでみた。その中でもっとも参考になりそうだと感じたのが本書である。

本書の著者は文筆家、イラストレーターで、「多様性をおもしろがる人になりたい」といいながら、虫が大の苦手。アリスニーカーに上ってきただけで悲鳴が上がると、自分の虫ぎらいの例を紹介している。私の授業で学生の大半が嫌いとした「ゴキブリ」については、「見た目が気持ち悪い」だけで殺してしまうと白状している。しかもそのことについて、「まったく身勝手な犯行」と分析している。ではなぜこのような本をつくってしまったのか。「はじめに」にその理由が切々と書かれている(引用者注:本文の読みがなにふっているルビは省略)。

「だが、人生も半ばも過ぎて、ふと考えた。このままでいいのか、と。わたしは死ぬまで『虫ぎらい』として生きていくのか。それもまったく『理不尽な理由』で嫌いなのだ。もっと言えば、『ほんとうは好きになりたいのに、嫌い』というややこしい状態である。

今さら虫が大好きになれるとは思えない。だが、せめて虫ぎらいを脱することができたら。『虫、まあ好きですよ。少なくとも、きらいではないですね。なにしろ、にんげんの大先輩ですから、敬意をもってますよ』

なーんてことをさらりと言ってみたい。それだけで自分のことがもっと好きになれる気がする。残りの人生に光がさして気がする。」(pp.8-9)

利己主義というか、大げさというか。そこまでの大問題ととらえてくれているだけで、虫冥利に尽きる!!!

ということで、さまざまに虫と関わっている人に話をきいて、自身の虫ぎらいを克服しようとしたわけだ。著者が話を聞いたのは以下の人びと(以下の説明は、出版社の本書紹介ページから引用)。

* 虫好きと虫ぎらいの分岐点を調査する教育学者 藤崎亜由子さん

- * NHK ラジオ「子ども科学電話相談」の名物回答者 久留飛克明さん
- * 『虫と遊ぶ12ヶ月』の著者で野遊びの達人 奥山英治さん
- * ツノゼミやゾウムシをモチーフにする芸術家 奥村巴菜さん
- * 『害虫の誕生』の著者で科学史の専門家 瀬戸口明久さん
- * 「こわい」の心理を分析する認知科学者 川合伸幸さん
- * 多摩動物公園の昆虫園ではたらく飼育員 古川紗織さん

<https://www.rironsha.com/book/20309>

(引用者注：pp.12-19の藤崎さんの章のためし読みができます)

幼児教育、生物学、心理学、科学史、アートに遊びと、けっこう多角的なアプローチであることが理解できる。話を聞いた中には虫が得意でない人もいる。

虫嫌いのわかれめは幼稚園の年長さん、虫を忌避するようになったのは近代の衛生概念登場、人間の「こわい」は他の動物にはなく人間だけのものがある、など、おもしろい話がいっぱい展開されている。

話を聞くなかで、「お、かわいいな」という虫も見つかった。「虫を好きになれるっていいな」という思いがどんどん強くなっていき、虫への興味も広がっていくのがとてもおもしろい。

ただ、話を聞き終わって、虫ぎらいは克服できたかということ、そうでもない。

「おわりに」で、本書を書いている途中で行った、インドではチャイにたかるハエは平気だったが東京に戻ったらそうでなくなったという体験を紹介している。さらに、そのギャップをインドでは「のびのびしていたからか」、「虫ぎらいとあたかも自分の不動の事実として縛られているだけではないか」、「旅とは遠くに行くことだけではなく、いまいる場所に縛られないことだ」と考察している(pp.155-156)。そして、「きらい」がもつ魔力、暴力性についてもちゃんと考えてみようと思うと、宣言するのだ(p.157)。虫ぎらいからここまで到達できる思考は非常に稀有ではないだろうか。

「きらい」と上手につきあいたい著者は、まだまだ虫ぎらい克服の「旅」が必要とっている。本書のあと、どのような旅をしたのか、知りたいものだ。

3 ◆AYUO(高橋鮎生) (2018)『OUTSIDE SOCIETY(アウトサイド・ソサエティ):あるサイケデリック・ボーイの音楽遍歴』月曜社、2000 円+税、四六判、264 ページ、ISBN：978-4-86503-064-8

<http://getsuyosha.jp/kanan/isbn9784865030648.html>

本書はミュージシャン AYUO の自伝(2007 年にウェブサイトには発表していたもの)および 1980 年代以降に雑誌などで発表していた原稿をまとめたものである。

あまり血縁であることを強調したくないが、著者の AYUO の父はいまも鬼才とされる作曲家・ピアニストの高橋悠治である。母はピアニスト・画家・ロックミュージシャン・西洋占星学研究家の秋本歌子(自伝『コスミック・ファミリー：アクエリアスの夢を生きる女』フィルムアート社、1998 年より)。AYUO は 1960 年に生まれ、3 歳からヨーロッパ各国、6 歳から 15 歳までニューヨークに住み、サイケデリック・ロックといわれる音楽に親しんだ。その影響で 1968 年にギターを始め(それが最初の音楽の学習体験)、多様なチューニングを試して楽しんでいる。現在、ギターをはじめとする撥弦楽器の奏者でもあり、これらをいかした楽曲をつくっており、Youtube で聴くことができる。

https://www.youtube.com/channel/UCt_E5zojAem60zxW6qZFBbQ

子どもは親を選べないので、親の経済状況や趣味、交遊関係などに大きな影響を受ける。両親ともア

ーティストで自身の表現の創造が第一であり、どちらも離婚・結婚をくりかえしたため、子どもはほっておかれる。母と義父（イラン人。銀行員）との家庭生活が終わったため、1975年に日本に帰ったが、父から「彼女（AYUOの母とは異なるパートナー）には君の面倒を見る義務はない。一人で住んだらどうだ」と宣告され、78年から一人暮らしを始めることとなった。高校もお金がないので中退させられ、合格した大学も父の経済的事情、信条（大学を思想的に受け入れない）から進学できなかった。

本書は自伝でありながら、親しんできた環境がサイケデリック・ロックやニューエージ・ミュージックの全盛期であり、その歴史が個々のミュージシャンの音楽や人の紹介にもなっており（しかも音楽家としての解釈や分析もあり）、この領域の歴史を日本語で読める稀有な資料でもある。

社会のアウトサイダーとして60年生きている人間の自伝のタイトルとしてOUTSIDE SOCIETYとつけたのがAYUOの思想の到達点であろう。家族によって、自身を取り巻く社会で生きることがむずかしくなり、そのような人を社会はアウトサイダーとして吐き出す。それが社会の「秩序」を保つ機能なのであれば、多様性をめざすようにするには、社会のほうが変わる必要がある。それを理解する人が増えなければ社会は変わっていかない。外側から社会を見ることのできる人こそが客観的に社会を語ることができる。社会の内側にいる人は聴く耳を持つ必要がある。音楽はじめ芸術は、アウトサイダーが生きのびる手段として発展させ、社会の中にいる人間の意識を変革させてきた。アウトサイダーとしてAYUOには社会がこう見えるという報告である。

AYUOの両親は日本人だし、日本語も話す。だから日本人といわれる。しかし、母語は英語で、発達期に接触していたのはニューヨークの文化や教育だ。なので、おまえは日本人ではないとよくいわれたそう。日本に住んでも日本が自国、故郷とすることができない。ギターがなければ、いま生きていなかったのかもしれない。自伝の章の終わりには以下のように記されている。

「社会からあまりはみ出さないように普段は文化的なマスクを付けた状態で生きていく。日本で見られている僕の顔は文化的には本当の自分ではなく、翻訳した姿とわかっているが、それを理解してくれるのは似たような体験をしている人たちだけだと思う。

僕にとっての文化人類学や哲学、心理学、比較宗教、現代科学、生命科学に対する興味は、アカデミックなものではなく、個人的に調べないといけないように追いこまれてのものだ。

こうしたことが理解してもらえるように、この自伝を書いた。

しかし未来には、地球人としての文化の時代が初めて開かれるのかもしれない。その時代に向かって言葉を書き、詩を書き、それを音楽にしている。これが僕の仕事の中心だ。」(p.131)

同じタイトルのCD作品がある（全14曲。Ayu Music Records、税込み2750円）。私はこちらを先に聞いた。大学時代以降親しんでいる、中世の音楽やアイルランドのトラッドにも通じるなつかしさを感じる。

それで本のほうも読んでみたのだ。地球時代の文化が開かれるのであれば、その未来、「伝統」といわれる音楽はこれらのような曲なのかもしれない。

本とCD双方味わうことで、引用した彼の言葉が理解しやすくなるだろう。

●上村光弘

Ⅰ ◆川端裕人 (2020) 『「色のふしぎ」と不思議な社会：2020 年代の「色覚」原論』筑摩書房、四六判 360 ページ、1,900 円+税、ISBN:978-4-480-86091-0

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480860910/>

本書は 2020 年に僕が読んだ本で一番のおすすめ。

なぜこの本がいいのか、それは僕が障害者だからである。端的にいうと、この本は色覚をテーマに、誰でも障害者であり、そうではないということを示してくれている。

著者が川端裕人さんということもある。川端さんの迫り方は「科学」をふまえて、最先端の研究者や関係者の取材を積み重ねていくので、焦点にしているテーマを理解するのにすごく役立つ。

「色覚」というテーマは、川端さん自身が当事者（先天性色覚異常）であることから、こだわりがあるテーマであり、自身の体験もふまえて科学と社会の双方に目配りをしている。

この本では取材をもとにした考察から政策提言まで踏み込んでいるところもいい。

本書が到達した色覚に関する主張は、たぶん、以下の 2 点である。

- ・色覚は多様だ。人によって違う。ある意味、誰でも色覚異常なのだ。
- ・色の見え方は多様なので、「正常か異常か」ではなく、連続してとらえよう。

なお、テーマや本書のタイトルのキーワードは以下のように定義されている。

色覚とは色に対する「感覚」であり、スペクトル（可視光線の信号を波長成分ごとに分解して、その成分ごとの強度を示したもの；p.17）分布の違いを色として見る仕組みがヒトに備わっているということ。（pp.25-28）

不思議な社会とは、「色という主観を尊重するよりも、「正常と異常」とに区別することにひたすら執着するおかしい状況・・・驚くべき多種多様な方面で、色覚を理由とした進学・就労の制限、遺伝的な差別があり、当事者と家族は社会的ステイグマを負わされた」（p.8）

川端さんの問題意識は「はじめに」で、以下のように書かれている。

本書は、先天性色覚異常の当事者である（けれど、人生の半分以上、それを忘れて過ごしてきた）川端裕人が、5 年ほど前にこの問題と再会して以来、学び、取材し、考察した結果を報告するものだ。（p.8）

その結果ぼくが知ったのは、今、先天性色覚異常についての科学が、旧来の「正常か異常か」といった枠組みから、「多様性と連続性」の枠組みへとすでに移っているということだ。（p.9）

2004 年、学校健診で色覚検査が事実上廃止されたが、2015 年ごろより日本眼科医会の医師たちが中心になって、「色覚検査を以前のように幅広く行い、当事者は自らの職業適性などをあらかじめ知るべきだ」という意見が強く提起されている。とくに一部の眼科医は「色覚異常は軽いほど危険」（軽いと自覚が難しいため）として、少しの異常も見逃すべきではないと主張している（p.9）。

いまの科学的知見では、「軽微な色覚異常」は人口の 4 割ほどいることがわかっているので、「軽いほど危険」をつきつめていったら、結局は誰もが「異常」で危険という倒錯した結論にいきつくしかない。これはやっぱり何かおかしい、ひたすら「異常者」を狩り出すみたいなことはやめて、「多様性と連続性」を前提にした議論をすべきではないか。（pp.9-10）

この点で色覚の問題は「多様性の世紀」の練習問題であるという。さらにゲノム時代の現在、遺伝差別の懸念が大きくなっているため、色覚の問題は「ゲノム時代の練習問題」でもあるという。

本書の目次を以下、紹介しておこう。

はじめに

「準備の章」先天性色覚異常ってなんだろう

第1部 “今”を知り、古きを温める

第1章 21世紀の眼科のリアリティ

第2章 20世紀の当事者と社会のリアリティ

第2部 21世紀の色覚のサイエンス

第3章 色覚の進化と遺伝

第4章 目に入った光が色になるまで

第3部 色覚の医学と科学をめぐって

第5章 多様な、そして、連続したもの

第6章 誰が誰をあぶり出すのか—色覚スクリーニングをめぐって

終章 残響を鎮める、新しい物語を始める

あとがき

補遺 ヒトの4割は「隠れ色覚異常」という話

眼科医や科学者への取材を通して、川端さんは色覚をめぐる「大きな問題」と「小さな問題」への解答を探り、ある程度の解決策を見出している。

大きな問題、「20世紀からつながる色覚をめぐる「問題系」がどんな形をしているのか」については、医学側（先天性色覚異常の眼科）において多様性と連続性の受容が遅れたことという暫定的な解答を出している。(p.294)

一方、小さな問題「色覚臨床の現場で眼科医が訴えている21世紀の色覚問題はどのように解決されるのがよいのか」は、従来型の色覚検査を広く徹底させても解決策にならないという。「人生の早いうちに自身が色覚異常であることを知れば、苦労が減る」という認識は、不必要かもしれない自制を働かせて自身の可能性を狭めてしまうので、やはり解決策にならないという。解決は本人への働きかけと社会としての環境整備を両輪で進めることという。つまり、21世紀型の色覚悲劇を避けるためには、当事者になる可能性のある人をピンポイントで探して助言することが1つの道だろうと提言する。検査することを正当化する条件（最良の科学的字根拠を良心的に、明示的に、思慮深く活用する）も示している(pp.300-301)。また、色のバリアフリーを進めて色覚異常の当事者が対応できる（弱視やロービジョンの人への対応にもなる）環境の整備をすることも大事という。(pp.300-303)

それでも最大の難問「学校などで不利な扱いを受ける」は根が深く、解決には「ヒトの色覚」についての理解が社会として深まる必要があるという。それを解決するために、ヒトの進化もふまえた用語に対する議論、色覚以外の遺伝差別問題（新型出生前診断など）についての情報共有、発達障害に対する解決策とのリンクなどが有効ではないかと提言している。

根が深い問題に対する解決は時間がかかるだろうが、本書の内容にすごく励まされた。

2◆長沼毅(2013)『死なない奴ら：極限から考える「生命とは何か」』講談社ブルーバックス、1844、新書判、240ページ、1,000円+税、ISBN:978-4-06-257844-8

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000194805>

過酷な環境でも生きている極限生物たち（沈んだタイタニック号で発見された鉄を食べるバクテリア、

南極でも生きているクマムシなど)。「不安定な炭素化合物」という生命がなぜ長大な時間を生き延びているのかを追究。不老不死の単細胞生物から寿命死する多細胞生物に進化し、そのことによって多様性を得ている。生命とは、「食うことで構造と秩序を保ち、エントロピー増大の原理に抵抗している」とまとめている。

めっちゃくちゃ変なところでも生きている生物ってすごい！ 生物としては子孫を残せばいいのだ。なぜ人間はそうでない人もいるのだろう。

3 ◆中島京子 (2019)『夢見る帝国図書館』文藝春秋、四六判、408 ページ、1,850 円＋税、ISBN:978-4-16-391020-8

<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784163910208>

帝国図書館自身の独白で語られる図書館の歴史と、著者が上野公園で出会った喜和子さんという女性（第二次世界大戦終了時6歳くらい）の人生をめぐる物語。図書館にかかわる司書と作家（樋口一葉、芥川龍之介、谷崎潤一郎など）が登場するのがおもしろく、また、かつていろいろ足を運んだ上野公園界隈が出てくるのがなつかしかった。

●桑垣豊

1 ◆『核被害の歴史 ヒロシマからフクシマまで』稲岡宏蔵 緑風出版 2020 年

この本の著者は、長崎市に生まれ、原爆投下の少し前に疎開していて、ご本人は助かったものご家族が被害を受けられました。この本は、核兵器から原発事故にいたる核による被害の歴史をご自身の運動にそってまとめられたものです。著者の稲岡さんとは、ダイオキシンの問題や核兵器撤廃の活動で、ご一緒させてもらってきました。

この本がもう少しでできるというところで、病気で倒れられて、2020 年の末にようやく出版にごぎつけれられました。一時は命が危ないこともあり遺書にする覚悟だったようですが、少し回復して自宅療養されています。稲岡さんのまとめられた75年におよぶ世界の核被害の歴史をご一読ください。

2 ◆『江戸幕府の感染症対策 なぜ「都市崩壊」を免れたか』安藤優一郎 集英社新書 1038 2020 年

江戸幕府は、江戸時代中期以降、飢饉にそなえて備蓄米をたくわえるようになった。それをたびたび襲いかかってきた食糧難のときに、庶民に放出した。後には、感染症が蔓延したときにも、米や銭を江戸庶民に配布した。その規模は、多いときで30万人以上。借家住まいの町人には条件をつけずに一律給付。あるときは、決定から行き渡るまでの日数は12日。各藩も備蓄米をそなえるところが出てきたという。あれっ、現代日本のほうが……。

3 ◆「特集 一九七〇年、梅棹忠夫が見ていた未来」季刊民族学 172 千里文化財団 2020 年

石油ショック前のバラ色の未来の1970年に、暗い未来を予想して、多くの人に受け入れられなかった梅棹忠夫氏。環境汚染、資源枯渇、医療の発達で普通に死ねない老後を予想して、希望的観測を排除して描いた未来。梅棹忠夫氏の予想はなぜ当たるのか。過剰な希望をいだかないから。

未来に希望をいただくのは大切だけど、過剰な希望は現実認識の目を曇らせる。マスコミ優勢の時代は自分の好まない情報も目に入ったが、見たい情報の載ったネットしか見ない人が増えるようになった。1970年の時点でも自分の理屈に都合いいことしか見ない人が多かったが、今は自分の気に入った情報ばかり見て、違う意見を過剰に批判するか、無視するかことが極端に進みつつある。

ご紹介の国立民族学博物館の季刊が手にいれにくい方は、
『梅棹忠夫の「人類の未来」』梅棹忠夫著、小長谷有紀編 2011年 勉誠出版
をご覧ください。

●鈴木綾

1◆ザ・ヘイト・ユー・ギブ あなたがくれた憎しみ

アンジー・トーマス/服部理佳 (岩崎書店) 2019年度課題図書(高校生)

16歳のスターが暮らす黒人街ガーデンハイツは「ゲットー」とも呼ばれる。麻薬で儲けるギャングが縄張り争いをし、暴力沙汰も発砲事件も絶えない。仕事もなく貧しさゆえに麻薬の売人になる者も多い。地元高校生のパーティではマリファナもお酒もふんだんで、スターは親に内緒で来たのを後悔する。だが幼なじみで初恋相手のカ ril と久しぶりに出会えた。ぎこちなく、でも懐かしく話し始めた時、すぐ傍で発砲音。カ ril とスターは夢中でその場から逃げ出す。カ ril の車で帰宅途中、警察の検問にかかるが、白人警官は初めからカ ril が危険物や薬物を持っているだろうと罪人扱い。何も持っていないというカ ril の態度が警官を煽るよう見えてスターが不安と恐怖を感じた時、カ ril は大丈夫かとスターを振り返る。そのカ ril を警官が撃った！

生きる希望の証として娘をスターと名付けた父は元ギャングで今は食料品店を営む。父はスターの誕生を機にギャングから足を洗った。母は看護師。二人はしょっちゅう喧嘩をするが深く愛し合い、子ども達と町を支えている。しかし町の闇は深く、スターは10歳の時、カ ril と3人組の仲良しだったナターシャを発砲事件で目の前で亡くした。以来スター兄妹は車で45分かかる私立校へ転校。母違いの兄はギャングのボスの妻になった実母とその二人の間にできた異父妹たちを気遣いながらスターの家で暮らし大学入学準備をしている。16歳で大切な友を二人までも目の前で撃ち殺されたスターは打ちのめされるが、父母に支えられながら、カ ril の撃たれた状況を明らかにしていく。カ ril の死をきっかけに町では抗議行動から暴動、破壊行為へと人々の行動がエスカレート。身の危険も感じる状況下でも黙っていたら何も伝わらないと、父も母もスターにしかできないことをする意味を考えさせる。正義とは何か、勇敢に行動するとは怖れないことではない。大切なのは怖くてもけして正しい行いをやめないことなのだ。想像もつかないほど苛酷な状況下のスターたち。それでも家族と友達とボーイフレンドと、手を取り合い進むスターがその名の通り輝いている。登場人物の個性も魅力的。アメリカの闇と希望の物語。

まるで昨年現実そのもののような小説……これほどの根深い対立を越えて、現実の未来は変わるだろうか……？

2◆コピーボーイ ヴィンス・ヴォーター/原田勝 岩波書店

コピーボーイとは電算化前の新聞社で様々な雑用を勤めたアルバイトの呼び名。新聞社の仕事の入口の一つでもあったそう。前作「ペーパーボーイ」で11歳の野球少年だったヴィクはいまや17歳。秋からの大学進学前に新聞社でアルバイトをしている。ある日、新聞の死亡者欄に大事なスピロさんの名前が……。ヴィクはスピロさんとの最後の約束で頼まれたことをやりとげなくては、と奮い立つ。吃音に悩みながらも自分を偽らずに生きていこうともがくヴィクがさすがすがしい。息子を大切に思うあまり、ヴィクの行動を全て手の内に置きたがる親との葛藤は読んでいてかなりイタイ……。

スピロさんが11歳の夏にくれた四分割された1ドル札に書かれた四つの言葉……。

学ぶ者 (Student)・尽くす者 (Servant)・商う者 (Seller)・探し求める者 (Seeker)

それは「魂の四分割」と言われ、その意味を考え続けてきたヴィクは、人生ではこの四つが等しい割合になるように生きるのだ、そのどれかに偏れば人はバランスを失い、道に迷うのだと気づく。自分の望みとは何か、今、自分がどこにいるのか、迷った時に問いかけたいスピロさんはこの世にはもういないが、心の中にいて、いつも励ましてくれている。スピロさんの言葉はこだまのように響き、共にいた記憶の中でよみがえる。

3◆故郷の味は海をこえて「難民」として日本に生きる 安田菜津紀/著・写真 ポプラ社

「難民」と呼ばれる人の置かれている過酷な状況。日本では難民認定が出入国在留管理局でされるために密入国の「罪人扱い」(監禁)され、自由な暮らしができないまま長い時間が過ぎてしまう。故国が国籍を認めなくなったシリアのクルド人。王族を支える氏族だったネパール人。カンボジア人。ロヒンギヤの人等々。それぞれ事情が異なるが、故国では生きていられないから生き延びようと逃げてきた人たち。日本での難民認定数は異様に少なく国連から何度も認定を増やすよう求められている。(2018年 0.25%/cf.カナダ 56.4%)

故国の料理を振る舞いながら著者に今の想いを語る人々。食卓を共にする穏やかな時間に語られる過酷な現実。著者との交流に支えられ、深刻な事実をただ並べるのではなく、「難民」である人たちが私たちの大切な隣人だと感じさせてくれる。写真がとてもいい。

●永井宏幸

ミキコはほんを読んでよかったと思うのはどういうとき? じいじはね、じいじが知らなかった大事なことが書かれているときか、それか、もやもやとじいじの頭にある考えをぴったりとしたことばで表してくれていたときだ。そういうほんにであうとうれしいね。

じいじの「読書ノート」に、「小説の方法、大江健三郎」の「方法としての小説」の章からの引用が残っていた。「他人の言葉の総体から自分の言葉を奪いかえす」これが大事だ、「他人の言葉の支配構造が様々な側面で日常生活における自動化作用を強制しているからである」、原発をめぐる言説の状況のなかにあって小説家に何ができるかを考えた論考だ。「他人のことば」とは組織された専門家のことば、国のことばで、「自分の言葉」とは市民が経験から知ってはなつことばのことなんだがね。

じいじはこれをいま ICRP の言語空間にあてはめている。科学的装いをもったこの言語体系を解体し

て、要素の意味を問いつめ、「自分の言葉」をよみがえらせる。

せっかくだからもうひとつ。「状況へ、大江健三郎」。いま読みなおしてみたが、そうか、世界の知恵はそこにまで達していたんだなあ。「眼くらましの言葉」の章。「科学によって封じ込められた時代に、われわれが科学の言葉に無関心でいられようはずはない」、「それでは、われわれは、科学者達の言葉から眼くらましの言葉と真の言葉を弁別する、どのような手がかりを持ちうるのであろうか？」そしてふたりの科学者の著作を紹介する。

「目覚める理性、ルネ・デュボス」

「専門家の決定を盲目的に受け入れる社会は、死にいたる病める社会である」、「科学と社会の相互関係について研究する人が不可欠になってきた」として、科学者と、その専門より外にいる人間との真のコミュニケーションは「受け取る側に、創造的な反応を呼びおこす場合、もっとも生産的で役立つのである」という。「他人の言葉」を市民の価値体系に書き換えることが求められているのである。

「偶然と必然、ジャック・モノー」

「(「客観的事実」と「価値の理論」のふたつの独立したカテゴリーが混合し雑然としている談論は) もっとも有害なナンセンスや、もっとも犯罪的な虚偽でしかない」、「とくに政治的叙説においては、……この危険な混合が絶えずしかも最も組織的に行われているのである」。じいじはこれを読んで、ああ、「仮説検定」が放射能の危険性を過小評価して社会に害悪をまき散らしていることもそうなんだよなあ、と思ったよ。

「眼くらましの言葉」には「悪疫(プレイグ・)年(イヤー)」というのものもある。ばあばは、日本人、お茶漬け民族だからね、という。どうしようもないねとあきらめちゃうのかな。

最後に、ミキコ。君のようにこれからを生きるこどものことばに耳を傾けてみないか。

<https://www.youtube.com/watch?v=T9YaagLB5Fg>

●中田哲也

1◆大江正章『有機農業のチカラ—コロナ時代を生きる知恵』(2020.10、コモンズ)

http://www.commonsonline.co.jp/new_books/2020/09/04/yukinogyopower/

昨年12月に急逝された大江さんの活動・発信の集大成。「脆弱な都市型社会と過剰な便利さの追求を見直し、様々なレベルにおける食の自給を目指すべき」とし、その軸となるのは「持続可能な社会をつくる有機農業的感性」であると主張されています。

原発事故の被災地に何度も足を運び、研究者や地元の農家とともに復興に取り組んだ様子も綴られています。

2◆田尾陽『飯館村からの挑戦—自然との共生をめざして』(2020.12、ちくま新書)

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480073631/>

エネルギー物理学者だった著者は、東日本大震災の直後の2011年6月に全村避難中の福島・飯館村に入り、地元の方たちと「ふくしま再生の会」を立ち上げ、住民目線で村内の放射線量の測定から活動を始められました。

避難指示が解除された 2017 年に自ら飯舘村に移住された著者は、「ぜひ現地に足を運んで再生の活動に参加してもらいたい」と訴えておられます。

3◆ネーネーズ『平和の琉歌』

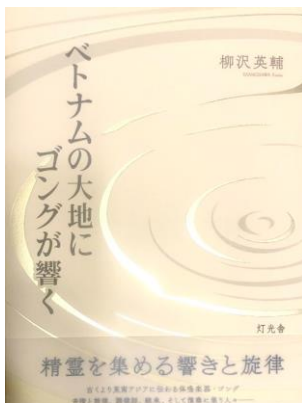
https://www.youtube.com/watch?v=cyk0_AO_osA

ヤマトンチューの桑田佳祐が「この国が平和だと誰が決めたの 汚れ我が身の罪ほろぼしに、愛を植えましょう この島へ」と自責の念を込めているのに対し、ウチナンチューのネーネーズ（知名定男）は独自に追加した 3 番で「この島の情けを知らせたいものだ」と見事に切り返しています。

ちなみにリンク先 YouTube の 2 曲目「黄金の花」も（脱資本主義の？）名曲です。

●丸山節子

1◆「ベトナムの大地にゴングが響く」柳沢英輔 灯光舎 2019年



東南アジアの仏教美術に惹かれて以来、音楽にも興味はあったのですが、「ゴング」のことはだけでは「ボクシング」しか思い浮かばない私にとって、この本のタイトルは衝撃的でした。内容説明としては「古くより東南アジアに伝わる体鳴楽器・ゴング。音階と旋律、調律師、継承、そして演奏に集う人々―ベトナム少数民族の村々を調査し、ゴング文化と音楽の深奥をさぐる一冊」とありますとおり、ゴングという楽器の説明、歴史、儀式の様子、この響きの魅力の秘密、この文化を守ろうとする取り組みなど、スコアも交えて詳細に紹介されています。

その地、村々に生きる人々によって個性ある演奏の文化が継承され、生活スタイルに合わせて変化もみせてきたゴング。そこに人々の生きる力を感じ、優雅な響きに癒される一冊。

QRコードが掲載されていて、アクセスすれば、具体的な演奏や楽器作りの様子などの映像など、中の説明に沿った映像を見ることができて理解が深まります。

2◆「オリーブ山上のキリスト」（橄欖山上のキリスト）

ルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン 初演：1803 4月 アン・デア・ウィーン劇場

2020年はベートーヴェンのアニバーサリーヤーということでしたが、ベートーヴェンが作曲した唯一のオラトリオがこのテーマだったと知り、とても興味を持ちました。

音源をせっせと手に入れまして、アーノンクール、ケント・ナガノ、セーゲルスタム、オーマンディの指揮による演奏を聞きましたが、キリストの物語の中で劇的な場面の表現として、様々な工夫がなされていて、それぞれ特徴がある演奏となっていると感じました。

実際には冬から春にかけてかなり色々聞いていた曲となります。

3◆「ゴルトベルク変奏曲」他 ヨハン・セバスティアン・バッハ

昨年の夏の終わりころから、コロナ禍の不安、亡くなられた方々への思いも含めて、口短調ミサ、マタイ受難曲、

ヨハネ受難曲など、バッハの様々な楽曲を毎日のように聞いていました。また、ゴルトベルク変奏曲の不思議な魅力にも改めて触れることになりました。

古今東西数々の名演奏がありますが、日本人の音楽家として、高橋望さん、梯剛之さんの生演奏に触れ、それぞれの個性あふれた演奏に感動しましたので、以下に CD の写真をご紹介します。また、バッハの奥深さを改めて感じ、もっと聞いてみたいという気持ちになるきっかけとなった、上野耕平さん（サキソフォン）のCDもおすすめてです。



●権上かおる

1◆武田楠雄 維新と科学 岩波新書 817 (1972)

もともとは、恩師の病床の慰めにと書き綴ったものという。

しかし、この文章の持つ気品に圧倒される。海外の科学技術を自分たちのものにしていく、過程が目の前に浮かび上がる。

2◆三好信浩 明治のエンジニア教育 日本とイギリスのちがい 中公新書 (1983)

技術の確立に欠かせない人材の養成法を機械工学を中心に詳述したもの。ダイアーなど外国人教師が、日本人の国民性に感ずるところが多いことも知る。

学校教育の確立についても興味深い。

3◆昭和女子大学光葉博物館 図録 徳川将軍家を訪ねてー江戸か令和へー (2020)

コロナ禍の昨年、数少ない展覧会の鑑賞で、最も印象に残ったもの。

尾張徳川家は、名古屋市の観光の中心ともいえる徳川美術館という常設展示館を持っている。しかし、徳川宗家は、常設館を持たない。昨秋に期間を短縮して行われた展覧会では、初めて目にするものばかりであった。篤姫と和宮を比較しながらの展示にも江戸と京都を感じさせてくれた。同時展示の大奥に近い井関隆子日記（同大学所有）では、動植物の細密画や江戸の水道の仕組みなどが挿絵とともに詳述される。勤勉さ、精密さなどの日本人の特性を感じ、明治維新で、諸外国からの科学技術を取り入れる下地を知る思いだった。

●林浩二

2020 年は Covid-19 で世界中のミュージアムが休館に追い込まれました。そんな中、2020 年は 68 ほどのミュージアム・展示を訪問しました。期間を限った展示だと、もう見られませんが、今回の 1 と 3 は施設そのもののご紹介ですので、落ち着いたらぜひ訪れていただきたいと思います。2 の被爆二世のプロジェクトにもご注目ください。

1 ◆ウポポイ（民族共生象徴空間）／国立アイヌ民族博物館（北海道白老郡白老（しらおい）町）

ウポポイ：<https://ainu-upopoy.jp/>

国立アイヌ民族博物館：<https://nam.go.jp/>

東京オリンピック・パラリンピック 2020 に合わせるべく、2020 年 4 月 24 日に公開を予定していましたが、Covid-19 により延期され、最終的には 2020 年 7 月 12 日に一般公開されました。わたしは 2020 年 11 月 11 日 - 12 日に見学しました。

ウポポイでは、日本語と並んでアイヌの言葉がもう一つの標準語として表示などに並記され、職員一人一人にもアイヌ語の呼び名がついています。

ウポポイの中の国立民族共生公園内には、体験交流ホール・体験学習館・工房・伝統的コタン等があり、職員による様々なプログラムが実演されています。各プログラムには定員があるので混雑する時期だと参加できず建物の見学だけになってしまうかもしれません。事前に予約できるものもあるので、可能であれば参加することを強く勧めます。これらプログラムに参加した後で博物館の展示を見ると、展示されている資料の意味・価値がより深く理解できると思います。

わたしが参加した体験交流ホールでの「伝統芸能上演《シノツ》～アイヌの歌・踊り・語り」（約 20 分）の終盤、白老アイヌのイヨマンテの上演の背景に、1900 年代前半の白老で撮影されたイヨマンテのモノクロ映像が流される「継承」の演出には感動しました。踊り手もみな若い方々でした（アイヌ・和人の区別なく採用していると聞きました）。

常設展示室は他の国立博物館と比べれば広くありません。Covid-19 のため、触って操作するような展示やタッチスクリーンまですべて使用できない状態でした。工夫されて作られた体験展示「テンパテンパ」についても見るだけなので消化不良でしたがやむを得ません。

この施設全体として、文化の継承を誰がどう担うのかという点でも多くの問題提起をしていると思います。

2 ◆宮島達男：クロニクル（1995-2020）

千葉市美術館（千葉県千葉市中央区）2020 年 9 月 19 日（土） - 12 月 13 日（日）

<https://www.ccma-net.jp/exhibitions/special/tatsuo-miyajima/>

デジタル表示の数字が 1 から 9 で順に減り（または増え）、0 はなく表示が消え、また始まるという展示をご覧になったことのある方も少なくないと思います。国内外の多くの美術館で常設で展示されている作品もあります。その宮島達男の 1995 年から 2020 年まで作品からなる大規模な個展。わたしは会期中に 4 回ほど見学、作家当人の講演会などにも参加しました。

作家当人による講演会の様子は公開されています。

<https://youtu.be/pavf1L86TT4>

わたしが特に注目したのは「時の蘇生・柿の木プロジェクト」。

<https://kakitreeproject.com/>

長崎の原爆を生き延びた柿の木が、樹医によって生き返り、たくさんの実を付けるようになったこと、その柿の実から苗を作って平和教育の象徴として希望者に配布していることを知った宮島達男は、それをアート作品として広めようと思い立ち、仲間とプロジェクトを立ち上げました。展示ではその経過を伝える絵本（出版されています）などと共に、プロジェクトの植樹に関わった人々（国内外多数）のインタビュー動画が展示されていて、感動的でした。

広島でも被爆樹木は注目されていて、広島市植物公園が被爆樹木から採取した種子などを低温保存しています。2017年に核兵器廃絶をめざす ICAN がノーベル平和賞を受賞した際には、ノルウェーの植物園でムクノキの植樹が行われました（授賞式に招待された広島市長・長崎市長も参加）。日本の植物園ではこれら被爆二世樹木に関心が低いのですが、これから何とか取り組みたいと考えています。

今回の3作品でいえば、3の石橋正二郎の寄附で日本パビリオンができたヴェネツィア・ビエンナーレ。宮島達男は1988年のヴェネツィア・ビエンナーレに招待されて世界から注目され、1999年のヴェネツィア・ビエンナーレでは日本パビリオンの展示作家に選ばれ、時の蘇生・柿の木プロジェクトも柱の一つに展示・ワークショップを行いました。

3◆アーティゾン美術館（東京都中央区）

<https://www.artizon.museum/>

開館記念展「見えてくる光景 コレクションの現在地」2020年1月18日（土） - 3月31日（火）

<https://www.artizon.museum/exhibition/past/detail/48>

東京駅近くのブリジストン美術館といえ思い出す方も多いかもしれません。同館は2015年5月18日に閉館し、場所を変えて建設された新しいビルで2020年1月18日にアーティゾン美術館として公開されました。わたしは再開初日の午後に見学しました。

公益財団法人石橋財団による純私立館、充実したコレクションを誇りますが、新たな収集も進めています。

同館では再開にあたり、混雑回避のために事前予約制を導入しました。定員に達していなければ1階の窓口でもチケットは購入可能な制度です。この制度を Covid-19 による混乱の前に始めていたことにご注目ください。日本の美術館・博物館では人気の企画展は混雑していて、ゆったり見られる状況ではないことも多かったのですが、入館者数を制限しても、作品を鑑賞する環境を向上させることを一早く始めました。それが、Covid-19 による臨時休館・再開時に他の多くの館でも、入館者数を限るために導入したのでした。建築・内装も様々に工夫されています。

※石橋正二郎は東京国立近代美術館の新築（1969年）、ヴェネツィア・ビエンナーレの日本パビリオン（1955年）に資金を提供しています。

●上田昌文

1 ◆宇井純『公害原論』（亜紀書房 合本新装版、872 ページ、2006 年）

2020 年 10 月にスタートした連続講座「日本の市民科学者—その系譜を描く」（全 12 回）も次回で 6 回目（※1）。参加者の皆さんが、講座が終わった後にメールでいろいろな感想やご意見をくださるのがありがたい。講座のなかでは毎回何冊もの本を取り上げているが—これまでに読んだ関連書は 100 冊くらいになるだろうか—、絶版の本も少なくない。読みたいけれど大冊なので手を出さないままになっている、という人もいらっしゃるように思える。でも、古書店やネットや図書館、という手があるし、読み始めてみると、非常に面白いのでどんどん読み進めていけるといっても、じつは多い。

その面白さの筆頭に来るのが宇井純さんの『公害原論』だ。

水俣病をはじめ、扱っている事柄の深刻さを思うと、「面白い」と言うのは憚れるかもしれないのだが、電車の行き帰り（あわせて毎日 2 時間）で、傍線を引きながら、寸暇を惜しむようにして読みふけることになった—そうさせてしまう迫力が、この 1970 年 10 月から東大で始まった夜間自主講座の 13 回分の講義録には、ある。宇井氏の警咳には 2、3 度しか接したことのない私だが（※2）、まさにその彼の肉声が聞こえてくるからだ。現場に身を投じて、あらん限りの科学的思考を発動させて、公害の全容をとらえようとする。何が環境破壊とすることによる被害をもたらしているのか。誰がどうその事実を隠蔽し、捻じ曲げ、擁護しているのか。研究というものの科学性、研究者の倫理性がいかにどのものであるのか。それらを、データをあげて、実名をあげて、具体的にひとつひとつ検証していく。まさに、『公害原論』は一人の人間の全人格をかけた総合的な探求の軌跡そのもの、と言える。

この出版物が、15 年に及ぶ夜間の「自主講座」という、参加した多数の市民による活動によって支えられたこと、そしてその営みの結果でもあることは、戦後の歴史に深く刻まれた輝かしい事実だと私は思う。

※1 連続講座についてはこちらを参照

https://www.shiminkagaku.org/csijsseminar_citizenscientists_2020_2021/

その動画もこちらに掲載している。

<https://www.shiminkagaku.org/movie/>

※2 宇井さんのことに言及した拙文はこちら

<https://www.shiminkagaku.org/30303020070904/>

2 ◆生活に役立つ（かもしれない）グッズから—この 1 点とは決め難いけれど……

2020 年に購入した生活用品でオススメのものを挙げてみる。ほんとうに毎日お世話になっているので、こうしたものを開発してくれた人、メーカーには感謝したいと素直に思う。写真を見れば用途や利点は一目瞭然なので、詳しい解説はしない。気になる方は商品名から検索してください。

1) 最新版 AMIR LED センサーライト 電池式 人感センサーライト 小型 電池式 3M テープ マグネット付き (昼白色)

事務所（2F）の建物の 1 階入口から 2 階の部屋に至る階段に取り付けている。足元など暗くなりしがちな場所に設置すると、その場所での電灯が不要になる。

2) ののじ 泡立て器 トング パグハグパスタトング グリーン 26cm PPT-01G

菜箸+トング兼用でフライパンでも使えるのがいい。

3) 本島椿 純椿油 赤箱大 118ml

私は皮膚のケアはこれだけ。1日1回薄く顔や手に。

4) デスクライト TaoTronics LED 目に優しい 電気スタンド 省エネ 学習机 テーブルスタンド 卓上ライト タッチセンサー調光 USB ポート付け[国内正規品] TT-DL13 JP (ホワイト)

調光と角度をいろいろ自由に変えることのできるすぐれもの。布団に入って読書する時にいつもお世話になっています。

5) ミコラ正規品 全8色【2020 冬 北欧 あったか もこもこルームシューズ【XL サイズ ~28.0cm】 M, L, XXL サイズもあります 寒い台所でもホカホカ暖かい 足首まですっぽり 冬用 防寒 ボアブーツ スリッパ

これと、湯たんぽと、断熱性の高い室内着のおかげで、今年の冬はとうとう一度もエアコン（暖房）を使わずにすみしました。



3◆コロナ禍のもと、TV 番組やネットで楽しんだいくつかの音楽

2020 年の世の中の最大の出来事は、新型コロナ感染症の世界的流行だろう。

市民科学研究室の活動もこれまでの外部の会場を使って集客しての講座などはほぼすべて控えることとなり、少々形を変えてオンラインでの実施となった（少人数だけ事務所に参集しオンラインを併用して、という形態も入れている）。オンラインになったことで新たな企画をこれまでにない頻度できそうだったので、思い切って、そうすることにした。そのためここ半年ほどは、講座の準備や事後処理（動画のアップロードなど）に追われる日々が続いている。

まとまった時間をとってじっくり音楽や美術作品とつきあう、ということがなかなかできないでいる

のが、もどかしい。ただ、こうした時こそ、録画・録音したものを、あるいはネットで拾えるものを、空いた時間で楽しむことができるのは、改めてありがたいと感じる。雑駁な選択になるが、印象に残ったものを並べてみる。

◆『ラヴェル：室内楽作品集（妖精の園）（ベルリン・フィルのメンバー）』

私の 2020 年の一番のお気に入り CD（といっても私の場合は衛星音楽放送 music bird の録音）。短いプロモーション動画がある。

https://www.youtube.com/watch?v=2fZ_RpCWrc&feature=emb_logo



ラヴェルはおそらく、全作品が傑作であるという音楽史上の離れ業を成し遂げた作曲家であり、構築性を持たせて曲の隅々までを磨き上げる底知れないほど精緻な作曲技術で、聴く人を、時に天上的な透明感に溢れた哀しみに誘うかと思えば、時に狂気スレスレの興奮の渦のなかに叩き込む。この特徴は、この CD を聴いてもよく伝わってくるだろう。私は「ヴァイオリンとチェロのためのソナタ」を大学生の頃に初めて聴いた時の驚きが忘れられない。「何だこの、原始的な踊りを踊らせようとするような、めまいがしそうな音楽は」……。一方、「序奏とアレグロ」は室内ハープ協奏曲とでも称すべき、じつに清新で一陣の風が吹き抜けていくような趣もある音楽で、ハープの魅力をここまで堪能させる曲もそんなに多くはない。この CD

での演奏は、文句のつけようのないレベルで、録音の良さも相まって、聴けばまったく時が経つのを忘れるだろう。コロナにちなんで一言加えれば、私は「序奏とアレグロ」の最高の演奏は、今はニューヨークの病院で救急救命医として活躍されている竹松舞さんのものだと思っている（『月の光～竹松舞・イン・パリ』 DENON (COCQ-83257) ）。TV のニュース番組でコロナの状況を語る竹松さんの姿がちらと映ったのを目にしたので、思わず昔の音源を引っ張り出して聴いた次第だ。

◆ヨーヨー・マが「コロナ禍を皆で乗り越えよう！」との思いをこめてつくった新譜『ソングス・オブ・コンフォート・アンド・ホープ』が心地よい。ヨーヨー・マには極めつけの美音をふんだんに振りまく『ヨーヨー・マ・プレイズ・モリコーネ』があって、私の愛聴盤だが、2020 年にはこの映画音楽の巨匠 E. モリコーネが亡くなった。そのこともあって、マの新譜を聴いた。伴奏のキャスリン・ストットはマのよい相棒だが、フォーレのピアノ音楽全集など、素晴らしい録音がある。

◆NHK-FM で聴いた「ミケランジェリ変奏曲～名盤を通して知る大芸術家」（4 夜連続放送、2020 年 12/7(月)～12/10(木)）。2020 年に生誕 100 年を迎えたイタリアの大ピアニスト、アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリに因んだ番組。私が一番好きなピアニストだから、紹介された音盤の大半はすでに聴いたものだったけれど、ゲスト出演のピアニスト伊藤恵さんのコメントが、キャンセル魔で有名だったミケランジェリのコンサートに 10 回ほど行く幸運に恵まれただけあって、リアルで面白かった。

◆同じく NHK-FM で聴いた「ベストオブクラシック 新倉瞳チェロ・リサイタル」（8 月 31 日放送）。2020 年はコロナでの無観客でコンサートが行われることが多かったようだが、この若いチェリストは、

自身の無観客コンサートの収録がラジオで放送される際に出演し、取り上げたそれぞれの曲への想いを語ったのだが、その「自演の再生＋自己解説」というやり方が興味深かった。これは後に HNK-BS の「クラシック倶楽部」で放映されることにもなり（10 月 9 日）、じつに素直な混じり気のない音作りの実演を目にすることができた。

◆2020 年に亡くなった、忘れがたい音楽家がもう一人。ロシアのニコライ・カプースチンだ。私は彼のピアノ曲が大好きで、そのことは「[2018 年 私のおすすめ](#)」に書いた。20 曲もある—その半分しか私は聴けていない！—ピアノソナタをはじめ、全作品の録音に挑んでいる川上昌裕の全曲録音シリーズ第 4 弾の CD が 2020 年に出た（ピアノソナタ 第 8 番、第 9 番ほか）。この果敢な取り組みを、私なりに応援したいと思っている。[彼が主催した追悼コンサート](#)も大成功だったようで、嬉しい。

◆ネットの音源と書籍の組み合わせで楽しむ、という点で、心からありがたいと思ったのは、ベンジャミン・ブリテンのオペラ『ねじの回転』において。ヘンリー・ジェイムスの有名な幽霊譚をもとにしたオペラだが、この 2 時間弱のオペラをネットで全曲観ることができるのと、

<https://www.youtube.com/watch?v=odvj84xINS0&t=774s>

<https://www.youtube.com/watch?v=mEA5ByEhX6g>

偶然古書店で非常に安く手に入れた『The Music of Benjamin Britten』(by Peter Evans, Clarendon Press, 1996, 586 ページ)に譜例がたくさん載っていることから、(声楽にとっても重きが置かれている)ブリテンの音楽の特徴—20 世紀の調性音楽の作り手のなかでは内的な体系性を際立って備えている作曲家に思えてならない—を自分なりに把握したいという思いが満たせそうな気がして、この本を読み始めたことが関係している。歌詞や台詞が英語なので直接読んで味わえる、ということもあって、このオペラの読み解きから手を付けている。